



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	チュクチ・カムチャツカ語族における属性叙述：N形の意味・機能の異同に着目して
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方言語研究, 2, 115-137
Issue Date	2012-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49254
Type	departmental bulletin paper
File Information	08kurebito.pdf



チュクチ・カムチャツカ語族における属性叙述
— N 形の意味・機能の異同に着目して —

呉 人 恵
(富山大学)

1. はじめに

チュクチ・カムチャツカ語族のひとつ、コリャーク語¹に N 形 (n-...qin/-qen) という品詞の違いを超えた属性叙述専用形式があり、対応する事象叙述形式 KU 形 (ku-/ko-...-ŋ) と対立していることは、すでに呉人恵 (2010) (近刊) で論じたとおりである。しかし、目をさらに広く同語族の他の諸言語に転じてみると、属性叙述はどの言語でもコリャーク語のように明確に現われているわけでは必ずしもない。

チュクチ・カムチャツカ語族には、南からイテリメン語、アリュートル語、コリャーク語、ケレク語、チュクチ語の 5 言語が属するが、これらの言語の N 形の有無をめぐることは、大きく次の点が指摘できる。

- (A) イテリメン語には、N 形はないが、これと似た機能をもつ別の形式がある。また、他の言語とは異なり、形容詞専用形式がある。
- (B) その他の言語、すなわち、チュクチ語、ケレク語、アリュートル語には N 形があるが、その顕現のしかたは一樣ではない。すなわち、
 - (B1) アリュートル語の N 形の意味・機能は、コリャーク語同様、主として属性叙述であると考えられるが、例外的には事象叙述らしき例も見られる。
 - (B2) ケレク語にはコリャーク語同様、N 形、KU 形いずれもあり、両者が属性叙述か事象叙述かで対立している可能性がある。
 - (B3) チュクチ語の N 形には、属性叙述だけではなく事象叙述の意味・機能がある。

そこで本稿では、この (A)(B) の 2 点に沿って、チュクチ・カムチャツカ語族の各言語の N 形あるいはそれに対応する形式の意味・機能が先行研究においてどのように記述されてきたかを整理分析する。そのうえで、特にチュクチ語とコリャーク語で同じ N 形という形式でありながら、意味・機能に違いが生じている点に注目し、その要因を探る。

第 2 節ではまず考察の前提として、コリャーク語の属性叙述形式の形態的・統語的特性について概観しておく。次に第 3 節では、イテリメン語から始め、アリュートル語、チュクチ語それぞれの言語の N 形あるいはそれと関連する形式が、先行研究においてどのように記述されているかを整理する。第 4 節では、現時点でコリャーク語の N 形との相違が最

¹ 本稿の対象となるコリャーク語は、チャウチュヴァン (cawcəvan) 方言である。チャウチュヴァン方言の音素目録は以下のとおり : /p, t, t', k, q, v, ʔ, ʕ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə/. /t', n', l'/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/c/ の音価は [tʃ]。

も明確であるチュクチ語を取り上げ、アリュートル語とも比較しつつ、そのような相違を生み出している要因について探りを入れる²。なお、上述のように、ケレク語にはN形、KU形の両方があることが知られているが (Volodin 1997)、分析に十分なデータの入手ができていないため本稿の考察対象からは外す。

なお、本稿では複数の言語の種々のデータを扱うため、音韻表記、グロス、訳の付し方については次のような方針を取り、できるだけ統一をはかる。

- (a) コリャーク語以外の言語の音韻表記については、コリャーク語との一貫性をできるだけ尊重し、次のように処理する。すなわち、イテリメン語とアリュートル語の先行研究ではコリャーク語の表記方針との一貫性があるため改変は最小限にとどめる。チュクチ語については、本稿で扱う先行研究相互に表記方針の違いがみられるが、本稿では読み取りの煩雑さを避けるため、Kurebito, T. and A. N. Zhukova (2004) の示す音韻表記に統一する。すなわち、子音、母音音素は /p, t, k, q, ʔ, s, ʃ, w, j, r, l, m, n, ŋ, i, e, a, o, u, ə/ とする。
- (b) グロスは、それぞれの筆者の解釈が反映されているため、改変は加えない。ただし、グロスがない場合には、必要に応じてグロスをつける。また、語彙的意味がロシア語で書かれている場合には、英語に直す。
- (c) 訳はすべて日本語で示す。

2. コリャーク語のN形

2.1. N形の形態統語的特徴

本節ではまず、これまでに明らかになったコリャーク語の属性叙述の特徴について概観しておく。コリャーク語のN形は伝統的には「質形容詞 (kachestvennye prilagatel'nye)」(Zhukova 1972:146) と呼ばれ、次の下線部にみるように形容詞のひとつとしてとらえられてきた (コリャーク語の「形容詞」全般についての詳細は、これを類型論的視点から整理し直した呉人恵 [2009] を参照されたい)³。

² 筆者は、現在、文部科学省科学研究費補助金 (基盤 (C)) 「コリャーク語形容詞述語構造に関する記述・類型研究」 (課題番号: 22520394) により研究を進めているが、本稿は、2012年度以降に計画しているチュクチ・カムチャツカ語族の属性叙述に関する比較研究の予備研究として位置づけられるものである。今回、コリャーク語を同系の他言語と比較するにあたっては、文献調査に加えロシア連邦ハバロフスク市において聞き取り調査 (2011.9.26-10.3) をおこなった。調査には、チュクチ語を母語として生育したが、現在までコリャーク語の環境の中で生活してきたため、いずれの言語も話す Ajatginina Tat'jana Nikolaevna 氏 (1955年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第5トナカイ遊牧ブリガード生まれ、女性) に協力していただいた。また、呉人徳司氏 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) にもチュクチ語の一次資料を提供していただいた。さらに、小野智香子氏 (千葉大学) にはイテリメン語の例文の形態素分析にあたって貴重なコメントと情報をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

³ ただし、Bogoras (1922) はチュクチ・カムチャツカ語族に見られるN形述語を形容詞としてはとらえずに、「名詞化した動詞の述語形式 (Predicative form of nominalized verb)」とし、「ある状態にある、あるいはある行為をおこなう」の意味を表わすとしている。この記述は、すでにN形の単一の品詞に収まりきれない性質に気づいていたことをうかがわせる。

- ・ 質形容詞 (kachestvennye prilagatel'nye)
 - ・ n-..-qin(e)/-qen(a) (N 形)
 - ・ 関係形容詞 (otnositel'nye prilagatel'nye)
 - ・ -kin(e)/-ken(a) (KIN 形)
 - ・ -in(e)/-en(a) (IN 形)
 - ・ ye-/ya-..-lin(e)/-len(a) (GE 形)
- (Zhukova 1972: 144-162)

N 形は、名詞修飾語としても述語としても用いられる点、たしかに形容詞としての統語的条件を満たしているといえる⁴。ただし、名詞修飾語として用いられる場合には、主名詞と絶対格において数の一致を示すが、斜格形での一致は見られないなどの制限があり、形容詞としての資格を十全に備えているわけではない。

- (1a) n-ə-mejəŋ-qin-Ø jaja-ŋa
PRP-E-big-3-ABS.SG house-ABS.SG
「大きな家 (絶単)」
- (1b) n-ə-mejəŋ-qine-t jaja-t
PRP-E-big-3-ABS.DU house-ABS.DU
「大きな家 (絶双)」
- (1c) n-ə-mejəŋ-qine-w jaja-w
PRP-E-big-3-ABS.PL house-ABS.PL
「大きな家 (絶複)」
- (1d) * n-ə-mejəŋ-qine-k jaja-k
PRP-E-big-3-LOC house-LOC
「大きな家で／に」

述語として用いられる場合には、主語の人称・数によって活用する。本稿の考察の対象となるのは、このように述語として用いられている N 形である。(2) はその例、表 1 は N 形述語の活用パラダイムである。

- (2a) ʏəmmo n-ə-mejəŋ-ə-jyəm.
I(ABS) PRP-E-big-E-1SG.TOP
「私は大きい。」
- (2b) ʏəcci n-ə-mejəŋ-ə-jyət.
you(ABS.SG) PRP-E-big-E-2SG.TOP
「君は大きい。」

⁴ Skorik (1977) は、同系のチュクチ語の N 形について、本来、形動詞であったものが次第にその名詞修飾機能を失い、述語的にのみ用いられるようになり、定形動詞化した可能性があると示唆している。

- (2c) Jaja-ŋa n-ə-mejəŋ-qin-Ø.
house-ABS.SG PRP-E-big-3TOP-SG
「家は大きい。」

表1 N形の活用パラダイム

Number/Person	Sg.	Du.	Pl.
1	n-..-jyəm	n-..-muji/-moje	n-..-muju/-mojo
2	n-..-jyət	n-..-tuji/-toje	n-..-tuju/-tojo
3	n-..-qin/-qen	n-..qine-t/-qena-t	n-..-qine-w/-qena-w

一方、筆者は呉人恵 (2010) において、コリャーク語のN形は、主に次の3つの根拠により形容詞という品詞の枠組みを超えて属性叙述機能を担う専用形式であると指摘した。

- ① 形容詞語幹のみならず、名詞、副詞、動詞語幹からも生産的に派生される点で、品詞を超えた性質をもつことをうかがわせる。
- ② 一時的状態を表わす時間副詞とは共起しえないことから、時間を超えた恒常的属性を表わすことがわかる。また、この点で、一時的状態を表わす非未来不完了の屈折形式 KU 形と対立する。
- ③ 事象叙述文における一般制約に反する形態的・統語的ふるまいをする。これは他動性の弱化と叙述対象の主題化として顕現するが、このような特徴は通言語的に観察される属性叙述の形態的・統語的ふるまい (影山 2009) に共通する。

以下では、この3点について具体例をあげながら概観しておく (コリャーク語の属性叙述に関するより詳細な記述は、呉人恵 [2010][近刊] を参照されたい)。

2.2. N形の属性叙述機能

まず、上述の①についてみる。次の(3)から(6)は、N形が「質形容詞」と呼ばれているにもかかわらず、形容詞語幹のみならず、名詞、副詞、動詞語幹からも作られることを示す例である。それぞれの品詞の認定は次のとおりである。語幹がそのまま絶対格単数形 (-n-Ø~重複~-ŋe/-ŋa) を取れるものが名詞、語幹がそのまま動詞を修飾できるものが副詞、語幹がそのまま不定形の -k/-kkə を取れるものが動詞である。

(3) 形容詞語幹

n-ə-mejəŋ-qin 「大きい」 (mejəŋ 「大きい」), n-əppl'u-qin 「小さい」 (əppl'u 「小さい」),
n-ə-qi-qin 「厚い」 (qi 「厚い」)

(4) 名詞語幹

n-ə-qejaly-ə-qen 「寒い」 (qejaly 「凍寒」), n-ə-muqe-qin 「雨が多い」 (muqe 「雨」),
n-ə-ktey-qen 「風が強い」 (ktey 「風」)

(5) 副詞語幹

n-ə-manaŋ-qen 「まばらだ」 (manaŋ 「まばらに」), n-inʃe-qin 「早い」 (inʃe 「早く」),
n-ə-teʃi-qin 「少しだ」 (teʃi 「少し」)

(6) 動詞語幹

n-ə-ʃaqatke-qen 「臭い」 (ʃaqatke 「臭いにおいがする」), n-ewji-qin 「健啖家だ」 (ewji
「食べる (自)」), n-ə-nu-qin 「食べられる」 (nu 「～を食べる (他)」)

Zhukova (1972) では、N 形が形容詞語幹のみならず、名詞、副詞、動詞語幹からも派生されることは記述されているが、後述のアリュートル語やチュクチ語のように、このうち動詞語幹から派生される N 形を動詞の屈折形式のひとつとして位置づけるような捉え方はしておらず、これらすべてを形容詞とみている。

次に②についてみる。(7) は、N 形が ecʃi 「今」という限定的な時間を表わす副詞とは共起できないこと (7b), その点において ecʃi 「今」と共起でき、一時的状態を表わす KU 形 (7a) と対立していることを示す。

(7a) Ecʃi ənno unmək ko-ŋot-at-ə-ŋ-Ø.
now he/she(ABS) very.much IPF-angry-VBL-E-IPF-3SG.S
「今、彼／彼女がとても怒っている。」

(7b) *Ecʃi ənno unmək n-ə-ŋot-qen-Ø.
now he/she(ABS) very.much PRP-E-angry-3TOP-SG

(7c) Ənno unmək n-ə-ŋot-qen-Ø.
he/she(ABS) very.much PRP-E-angry-3TOP-SG
「彼／彼女は (恒常的に) とても怒りっぽい。」

次に③についてみる。N 形に見られる異常な統語的ふるまいの本質は、属性叙述が基盤としている有題文の構造に文中の名詞項や付加詞を組み入れ直すための方策であることにあ
る。具体的には、主に次のような特徴が観察される。

- a. N 形末尾の人称マーカーは、主語や目的語といった名詞項を標示するのではなく、主題を標示する。主語だけではなく、目的語、斜格名詞 (場所名詞) も主題として取り立てることが可能である。
- b. 属性叙述の対象となる名詞は、絶対格を取る。
 - b-1. 他動詞主語が属性叙述の対象となる場合、逆受動化が起きる。主語は能格から絶対格に昇格し、目的語は斜格に降ったり動詞に抱合されたりする。また、これにともない動詞は自動詞化する (8a)(8b)。
 - b-2. 目的語が属性叙述の対象となる場合、絶対格はそのまま主語が削除される (9a)。
 - b-3. 斜格名詞が属性叙述の対象となる場合、絶対格に昇格する (10a)。

なお、次の (8c)(9b)(10b) は、それぞれの属性叙述文に対応する事象叙述文の例である。

- (8a) 【属性叙述：逆受動化接尾辞 -cet, 主語＝絶対格, 目的語＝与格】

əlla-Ø n-aŋja-cet-qen-Ø kəmeŋ-ə-ŋ.
mother-ABS.SG PRP-praise-AP-3TOP-SG child-E-DAT
「母親は（自分の）子供をよくほめる（人だ）。」

- (8b) 【属性叙述：主語＝絶対格, 目的語＝抱合】

əlla-Ø n-ə-kmeŋ-ə-ʔ-aŋja-qen-Ø.
mother-ABS.SG PRP-child-E-E-praise-3TOP-SG
「母親は（一般的な）子供をよくほめる（人だ）。」

- (8c) 【事象叙述：他動詞活用, 主語＝道具〔能〕格, 目的語＝絶対格】

Ecɣi kəmiŋ-ə-n k-aŋja-ŋ-ne-n əllŋ-a.
now child-E-ABS.SG IPF-praise-IPF-3SG.S-3SG.O mother-INSTR(ERG)
「今、母親が子供をほめている。」

- (9a) 【属性叙述：他動詞語幹＝自動詞活用, 主語＝Ø, 目的語＝絶対格】

Kəmiŋ-ə-n n-aŋja-qen-Ø.
child-E-ABS.SG PRP-praise-3TOP-SG
「子供は（恒常的に）ほめられている。」

- (9b) 【事象叙述：他動詞活用, 主語＝道具〔能〕格, 目的語＝絶対格】

Ecɣi kəmiŋ-ə-n k-aŋja-ŋ-ne-n əllŋ-a.
now child-E-ABS.SG IPF-praise-IPF-3SG.S-3SG.O mother-INSTR(ERG)
「今、母親が子供をほめている」

- (10a) 【属性叙述：自動詞活用, 主語＝Ø, 場所名詞＝絶対格】

Nutenut n-ə-qejaɣ-ə-qen-Ø.
tundra(ABS.SG) PRP-E-chill-E-3TOP-SG
「ツンドラは（恒常的に）寒い。」

- (10b) 【事象叙述：自動詞活用, 主語＝3 単主(dummy), 場所名詞＝場所格】

Ecɣi nute-k ko-qejaɣ-at-ə-ŋ-Ø.
now tundra-LOC IPF-chill-VBL-E-IPF-3SG.S
「今、ツンドラでは寒い。」

3. 同系他言語における N 形の現われ

次に、コリヤーク語と同系の諸言語の属性叙述の現われについて見ていく。まず語族内

では最南に位置するイテリメン語から始め、アリュートル語、チュクチ語と概観する。

3.1. イテリメン語

チュクチ・カムチャツカ語族の諸言語の基礎語彙を収録した Kurebito, M. (ed.)(2001) に記載されている英語見出し語が形容詞であるもののうち、チュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語の3言語すべてでN形で現われている見出し語数は54語である。イテリメン語でこれらの語に対応する語をみると、複数の形式があることがわかる。すなわち、(A) -laχ 形、(B) その他のイテリメン語固有の形式、(C) 借用と思われるN形、(D) ロシア語からの借用語の4種類である。この他、(E) 対応する形式が認められなかった語もある。

(A) の -laχ 形はさらに、(i) 同系の他言語と語根が異なる語、(ii) 同じ語根であると考えられる語、(iii) 同系の他言語の語根となんらかの類似性があるが、同じであると断定できない語に分類される。それぞれの語の内訳は次表2に示すとおりである。なお、イテリメン語の語数とその他の言語の語数の合計にずれがあるのは、その他の言語で複数のN形で表わされる語がイテリメン語では同じ1つの語で表わされているのが2例あるためである。

表2 イテリメン語形容詞の現われ方の割合

	Itelmen			語数(%)	Chukchi/Koryak/ Alutor	語数(%)
A	-laχ形	i	他言語と異語根	29(62%)	N形	49(100%)
		ii	他言語と同語根	4(9%)		
		iii	不明	2(4%)		
	B その他の形式			4(9%)		
C	N形 (借用語)			2(4%)		
D	ロシア語からの借用語			1(2%)		
E	対応語なし			5(10%)		
	合計			47(100%)	合計	49(100%)

下に (A) から (D) までの具体的な語例をあげる。なお、比較のために、(A) から (C) はコリヤーク語（ただし、1語のみアリュートル語）のN形を、(D) はロシア語を各語例の後ろの括弧内にあげる。

- (11A-i) plaχ 「大きい」(nəmejəŋqin), ulʰulʰaχ 「小さい／細かい」(nəpplʰuqin), aslaχ 「高い」(niwləqin), izulaχ 「低い」(niwtəqin), kcoŋlʰaχ 「薄い／細い」(nəvəlʰyəqin), kəzlaχ 「重い」(niccaqin), əmsxulaχ 「軽い／容易な」(nəmiquqin/nəmelqin), kewlaχ 「強い」(nəketyuqin), eʰlʰ tlaχ 「柔らかい」(nəjkəqin), cʰewzlaχ 「甘い」(nalʰlʰawcacaqen), ciʰxplaχ 「辛い」(nəmjəqin), telwelaχ 「遅い」(nəkiməqin), kotlaχ 「広い」(newəŋqin), kunʰlʰaχ 「狭い」(nəqvəqin), xkalaχ 「熱い／暑い」(nətyəqin), ləqlaχ 「寒い／涼しい」(nəqejaʎəqen/niyəqin), azzelaχ 「明るい」(nʰeccəqen), txunlaχ 「暗い」(nəvutəqin), atxlaχ 「白い」(nilyəqin), ʰlʰəlaχ 「青い」(nutelyəqin), teŋlaχ 「よい」(nəmelqin), kʰəzulaχ 「浅い」(nəcemqin), ktlaχ 「荒い」(nəfəwqin), atxlaχ 「淡い」(nʰecəqin), cqlaχ 「生

- の」(nɪl'əqin), wajmalax「楽しい」(n'enjin'məqin), əsklalaχ「恥ずかしい」(nəŋikəlqen), qəzlaχ「困難な」(nəpkawqen), wetwetlaχ「まっすぐな」(nəvətɣəqen)
- (11A-ii) ktlaχ「堅い」(nəktəqin), iwlaχ「長い」(niwləqin), ikəml'aχ「短い」(nikməqin), omlaχ「暖かい」(nomqen)
- (11A-iii) əmc'laχ「苦い」(nəmjəqin), c'ac'alax「赤い」(nəceccəqen)
- (11B) k'əŋksxʔin「弱い」(nəŋujqin), nicxalq「速い」(ninʔəqin), kkelknin「喧しい」(nəpəcyəcyəqin), kweqateknən「年を取った」(nənpəqin)
- (11C) nomqen「太った」(nəʔumqin), nirwoqen「鋭い」(nirwəqin [A⁵])
- (11D) nowoj「新しい」(novyj)

以上から、少なくとも Kurebito, M.(ed.)(2001) であげられている基礎語彙をみる限り、イテリメン語には同系の他言語とは語根も接辞も異なる -laχ 形 (11A-i) が圧倒的に多いことがうかがえる。同じ -laχ 形でも他言語と同語根のものが少数ではあるが認められるもの (11A-ii) については、独立の言語として分岐する以前からの語根の痕跡を示すものである可能性がある。

3. 1. 1. 固有の形容詞形成接辞 -laχ

-laχ は、形容詞語根のみに付加される純粋な形容詞形成接尾辞である。-laχ は、管見の限りでは、N 形のように他の品詞語幹から派生されることはない。Volodin (1976) によれば、-laχ を取る形容詞語根は 70 足らずであり、意味的には、物や人の性質、量的特徴、寒暖・味覚・聴覚的特徴、色彩的特徴などを表わす。このように形容詞語根にのみ付加される接尾辞があることは、同系の他言語とは異なるユニークな点であるといえる。

Kurebito, M.(ed.) (2001) によれば、(12) でみるように、チュクチ語 (CH)、コリャーク語 (K)、アリュートル語 (A) において N 形で現われる形容詞の大半が、イテリメン語 (I) ではこの -laχ がついた形式である。このことから、イテリメン語には他の同系諸言語とは異なり、形容詞専用形式があることがわかる。Kurebito, M. (ed.)(2001) には、イテリメン語の北方言と南方言の 2 方言の語彙が記載されているが、ここでは北方言の形容詞をあげる。

(12)	CH	K	A	I	
	nəmejəŋqin	nəmejəŋqin	nəmeŋəqin	plaχ	「大きい」
	nəppəʔuqin	nəppl'uqin	n'əməqəqin	ul'ul'aχ	「小さい」
	nikwəqin	niwləqin	nətyənyəluqin	kalaŋlaχ	「高い」
	niwtəqin	niwtəqin	niwtəqin	izulaχ	「低い」
	nitsəqin	nissəqin	niccaqin	kəzlaχ	「重い」
	nəmərkuqin	nəmiquqin	nəmətquqin	əmsxəlaχ	「軽い」

⁵ Alutor (アリュートル語) の略。チュクチ語も類似の nirwəqin であるが、コリャーク語では nicivəqin が対応しているが、/t/ - /c/ の対応は見られないため、異根であると考えられる。

Volodin (1976) によれば, **-laχ** 形は通常, 述語として機能する。

- (13a) Omlaχ kist.
warm.ABS house.ABS
「家は暖かい。」 (Volodin 1976:321)

- (13b) Amlaχ kiγ.
hallow.ABS river.ABS
「川は浅い。」 (Volodin 1976:321)

ただし, 名詞修飾をおこなっている **-laχ** 形も散見される。主名詞+形容詞という語順も形容詞+主名詞という語順もいずれも可能である。

- (14) Ememqut qeʔm plaχ-Ø ksatoʔan.
Ememqut.ABS hole.ABS big.ABS 掘った
「エメムクットは大きい穴を掘った。」 (Volodin 1976:322)

- (15) Kəmank teglaχ nonom an-sk-qzu-nen.
1SG.ALL よい.ABS 食事.ABS DES.3-make-DUR-3>3SG
「私によい食事を作るように。」 (小野 2011:28)

主名詞と形容詞の間に他の語が挿入されることもある (主名詞は傍線, 形容詞は波線)。

- (16) mumwuʔn k'oʔit-es-kineʔn koxank ʔi plaχaʔn
波.PL.ABS 来る-PRES-3SG.OBL 石.SG.ALL とても 大きい.PL.ABS
「とても大きい波が石にやって来て…」 (小野 2011:29)

3. 1. 2. 属性叙述接周辞 **k'...ʔin/-ʔan**

N 形との関連性が考えられるのは, むしろ上表では「(B) その他の形式」のひとつである **k'əŋksxʔin** 「弱い」を派生する接周辞 **k'...ʔin** である⁶。Bogoraz (1922) は **k'...ʔin** をチュクチ語やコリャーク語の N 形にあたるとみている。実際に, **k'...ʔin/-ʔan** には, 動詞 (17a) や名詞語幹 (17b) につき, 述語として用いられて恒常的な属性を表わすという, N 形との共

⁶ この他, その他の形式 (B) として, **nicxalq** 「速い」, **kweqatekn** 「年を取った」, **kkelknin** 「喧しい」があげられているが, このうち, **nicxalq** は副詞派生接尾辞 **-q** がついた副詞であるため, この分類からは除外される。一方, **kkelknin** 「喧しい」, **kweqatekn** 「年を取った」は Volodin (1976) が **k'...ʔin** とともに第 3 不定形動詞として分類している接周辞 **k...-knin/-kn** からなる形式である。動詞語幹 **kel** 「叫ぶ」, **weqate** 「年をとる」から派生しており, 小野智香子氏 (私信) はこれを「形動詞」としている。また, Bogoraz (1922) は, これをチュクチ語, コリャーク語の結果相を表わす **ye-/ya...-lin(e)/-len(a)** (GE 形) に対応する形式であると見ている。

通性をうかがわせる特徴がある。

- (17a) k'nu⁷?in「大食いだ」(nu「食べる」), k'wetat?an「働き者だ」(wetat「働く」), k'ma?l'?an
「冗談好きだ」(ma?l'「冗談を言う」), k'l'ŋizi?in「笑い好きだ」(l'ŋizi「笑う」)
(17b) k'cɲak?an「こぶだらけだ」(cɲak「こぶ」), k'pxal?an「穴だらけだ」(pxal「穴」), kmil?in
「シラミだらけだ」(mil「シラミ」)

とはいえ, k'...-?in/-?an には, 通常, 他動詞語幹に付加される, 過去の意味を表わすなど (k'an'cp?an「彼／彼女は彼／彼女を教えた」, k'l'innu?in「彼／彼女は彼／彼女を養った」), 必ずしも N 形と共通しているわけではない特徴も見られる。したがって, 現時点では N 形との対応を即断することはできない。これについては, 今後, 予定している共同研究において明らかにしていきたいと考えている⁸。

3.1.3. 借用形式

次に, 借用形式についても触れておく。まず, N 形の借用と考えられる語についてみる。イテリメン語北方言は, 北でコリャーク語, アリュートル語いずれとも接している。

イテリメン語の nomqen「太い」は, コリャーク語, アリュートル語ともに nəʃumqin であることから, どちらから借用したものかが不明である。一方, もうひとつの N 形である nirwoqen「鋭い」は, コリャーク語にない /r/ を含むだけではなく, アリュートル語の nirvəqin と語形が類似していることから, アリュートル語からの借用である可能性が大きい。

ロシア語からの借用語としては, nowoj「新しい, 若い」の 1 語が認められている。同系の他言語には nətujqin (コリャーク語), nəturqin (チュクチ語) という N 形があるのとは異なり, イテリメン語では「新しい」「若い」に当たる固有語がないことは興味深い。

3.2. アリュートル語

次にアリュートル語についてみる。アリュートル語にはコリャーク語同様 N 形がある。ただし, コリャーク語の先行研究 (Zhukova 1972) の記述とは異なり, アリュートル語では, N 形は形容詞としてだけではなく, 後述のチュクチ語同様, 動詞の屈折形式としても記述されている (Kibrik et al. 2004)⁹。属性叙述機能については触れられていないものの, N 形が形容詞のみならず, 動詞ともかかわっていることを指摘している点は重要である。以下では,

⁷ コリャーク語では nu は他動詞であり, N 形 n-ə-nu-qin は目的語に一致し, 「食べられる, 食用である」の意味を表わす。一方, 「大食いだ」の意味は, これに対応する異根自動詞 ewji から派生された n-ewji-qin により表わされる。

⁸ 脚注 2 で述べたように, 筆者は 2012 年度から文部科学省科学研究費補助金 (基盤 (C)) 「コリャーク語形容詞述語構造に関する記述・類型研究」 (課題番号: 22520394) により, 小野智香子氏 (イテリメン語), 永山ゆかり氏 (アリュートル語), 呉人徳司氏 (チュクチ語) を連携研究者として迎え, チュクチ・カムチャツカ語族の属性叙述に関する比較研究をスタートさせる予定である。

⁹ ただし, Nagayama (2003) では, N 形が動詞語幹からも派生されることには言及されているが, Zhukova (1972) のコリャーク語の N 形の記述同様, 質形容詞として扱っている。

形容詞、動詞としての N 形の記述を Kibrik et al. (2004) に基づき概観する。そのうえで、実際に用いられている例を Kibrik et al.(2004), Nagayama (2003) から収集し、その意味・機能について分析を加える。

3.2.1. 形容詞としての N 形

コリャーク語同様、アリュートル語でも、N 形は形容詞とみなされている。Kibrik et al. (2004) によれば、アリュートル語の形容詞はコリャーク語同様、質形容詞と関係形容詞に二分されており、N 形は前者に分類されている。述語として用いられる場合の活用パラダイムは表 3 のとおりである。

表 3 アリュートル語形容詞述語のパラダイム (Kibrik et al. [2004:281]を基に作成)

Number/Person	sg	du	Pl
1	n-...jɣəm	n-...muri	n-...muru
2	n-...jɣət	n-...turi	n-...turu
3	n-...qin	n-...qina-t	n-...qina(w(wi)~-laŋ~ -laŋin~-laŋina(w(wi)))

コリャーク語と異なるのは、3 人称複数の語尾である。すなわち、コリャーク語では n-...qine-w/-qena-w のみであるが、アリュートル語にはこの他 -laŋ~-laŋin~-laŋina(w(wi))¹⁰がある。

形容詞としての N 形は、名詞修飾語としても述語としても用いられるが、前者の方が使用頻度が高い。また、名詞的な用法も見られるが、斜格で現われることはないとされている。

形容詞としての N 形については、Nagayama (2003) により詳しい記述がみられる。Nagayama (2003) によれば、N 形はコリャーク語同様、形容詞 (18a) のみならず、名詞 (18b)、副詞 (18c)、動詞 (18d)、時には接続詞 (18e) などの語幹からも派生され、事物の恒常的な性質を表わす。

- (18a) 形容詞語幹 : nəmeŋəqin 「大きい」, nəvqin 「黒い」, nəturqin 「新しい／若い」
 (18b) 名詞語幹 : nəpəyəqin 「浮くのがうまい」, n'ɪl'əqin 「湿った」
 (18c) 副詞語幹 : nətan'ɪavqin 「正しい」
 (18d) 動詞語幹 : nəqajavqin 「極寒の」, nəŋeŋəqin 「騒々しい」, nujvalqin 「魔法の」,
 nənuqin 「食べられる」
 (18e) 接続詞 : nəŋatavqin 「普通の」

¹⁰ -laŋ~-laŋin~-laŋina(w(wi))の -la の部分は、次のように、動詞の屈折において現われる複数を表わす -la と関係があるかもしれない。たとえば、次の例を見られたい。

taŋər ɣala-la-t ɣəlwəte-w.
 how.many pass-PL-3pl.S+PF day-NOM+PL
 「数日が過ぎた。」

(Kibrik et al. 2004:13-14)

Nagayama (2003) はさらに, Kibrik et al. (2004) に反して斜格で主名詞と一致を示す例もあげている。(19) は場所格, (20) は与格の例である。

- (19) ənnu n-ə-ʕum-qina-k ɣavəsɟ-ə-k ɣavtəɟ-i.
he/she:ABS ADJ-E-fat-ADJ:3sg-LOC woman-E-LOC get.married-3sg.S
「彼は太った女と結婚した。」

- (20) ənnu n-ə-ʕum-qina-ɟ ɣavʕan-ə-ɟ imɟul-ə-tkə.
he/she:ABS ADJ-E-fat-ADJ:3sg-DAT woman-E-DAT miss-E-IMPF:3sg.S
「彼は太った女を懐かしがっている。」

3. 2. 2. 定形動詞としての N 形

Kibrik et al. (2004) は, N 形を動詞の屈折形式のひとつとしても扱っている。ただし, 結果相を表わす *ya...-lin* (コリャーク語の GE 形に相当) とともに, 単一人称活用形式である点で, 主語も目的語も標示する他の一般的な動詞屈折形式とは区別している¹¹。

Kibrik et al. (2004) は, この N 形が形容詞の形式と同一であることから, ‘deverbal adjectives (出動形容詞)’ と呼んでいる。人称と数が標示されるその活用形式は上表 3 で見た形容詞のそれと同じであるため, ここでは繰り返さない。

意味的には, 常に起こっている, あるいは, 潜在的に起こりうる習慣的行為 (‘a habitual action that usually takes place or potentially can take place’) を表わすとされている (Kibrik et al. 2004:254)。例文は次の通りである。

- (21a) ɣəmmə qonpəɟ nəvitatiɣəm.
「私は (いつも) 働いている。」

- (21b) ɣəmmə nəkalʔisitiɣəm.
「私は (いつも) 書いている。」

- (21c) ənnu nəwaɟiqin.
「彼女はいつも縫物をしている。」

- (21d) sullə nəjəlqin.
「塩は売っていますか？」

- (21e) pəʕunnə nənuqin.
「そのきのこは食べられる。」 (Kibrik et al. 2004:255)

¹¹ この 2 形式が動詞の屈折体系の中で特異な位置を占めていることは, これらが典型的な動詞というよりは, むしろ名詞性を帯びていることによると考えられるが, これについては改めて別稿で論じたい。

3.2.3. テキストに見られる N 形の意味

次に Kibrik et al. (2004) ならびに Nagayama (2003) の実際のテキストから N 形を拾い出し、N 形がコリヤーク語のように恒常的属性を表わすのかどうか、その意味特徴を探る。

Kibrik et al. (2004) の 41 のテキストの中に N 形は 50 例認められる。このうち、名詞修飾語として用いられているのが 26 例、述語として用いられているのが 23 例、主名詞を取らずに単独で名詞項として用いられているのが 1 例である。(22)(23) はこのうち、述語として用いられている例であるが、それぞれ「靈魂の言うこと」「テルップ（架空の野生動物）の肉」の属性について述べていることは明らかである。出典はすべて Kibrik et al. (2004) からであるが、例文末尾のかっこ内にはテキスト番号ならびに例文番号を記してある（Kibrik et al. は KIB に省略）。

- (22) awən, kala=ʔaŋəlʔ-in iv-γərŋ-ə-n n-īpə-qin.
really magical=spirit-POSS+3sg speech-NOM+SG ADJ-exact-ADJ+3sg
「本当に靈魂の言うことは正しい。」 (KIB Text 7-12)
- (23) Tərup=təryətər n-alʔl'o-qin, num kiwəl
Teruppe=meat-NOM+SG ADJ-sweet-ADJ+3sg again blood+NOM+SG
n-alʔl'o-qin.
ADJ-sweet-ADJ+3sg
「テルップの肉は甘い、血も甘い。」 (KIB Text 10-3)

この他の例も大半が、文脈から同様に恒常的な性質を表わす属性叙述であることがうかがえる。しかし、例外的に一時的状態を表わすと考えられる例が 1 例だけであるが観察されている。

- (24) ŋetaŋ awwav-i liqtəŋ to ina-γal-e, məri γəmmə
then leave-3sg.S+PF back and 1sg.P-pass.by-3sg.S+PF because I+NOM
n-it-iyəm ʔəlʔəl-γiŋki.
ADJ-be-1sg snow-IN-LOC
「それから彼は後戻りし、私のそばを通り過ぎた。なぜならば、私は雪の下にいたからだ。」 (KIB Text 37-15)

この例では、櫓から落ちて雪の中に埋もれてしまった「私」の一時的状態を叙述するのに N 形が用いられており、属性叙述の読みはできない。

Nagayama (2003) があげた 4 つのテキストには N 形は 6 例現われている。そのうち、3 例は述語として用いられている例、残りの 3 例は名詞修飾語として用いられている例である。述語として用いられている 3 例はいずれも属性叙述の読みができる。Nagayama (2003) のテキストは NA と略す。

- (25) Jaqqe miyya n-ə-jəmŋ-ə-qin keŋ-ə-ŋ?
 ah who:ABS.sg ADJ-E-fear-E-ADJ:3sg bear-E-DAT
 「ああ、誰がクマがこわいのか？」 (NA Text 1-14)

- (26) Miyya n-ə-jəmŋ-ə-qin ʕiy-ə-ŋ?
 who:ABS.sg ADJ-E-fear-E-ADJ:3sg wolf-E-DAT
 「誰がオオカミがこわいのか？」 (NA Text 1-16)

- (27) Tok am qun maja ənnula-turu miyya
 well well.then INT where from.which-2pl who:ABS.sg
 n-ə-mit-qin tapaŋ-ki ŋaninəna-ŋqal Jurɣənɰajam
 ADJ-E-skillful-ADJ:3sg make.soup-INF that-side PSN:ABS.sg
 t-it-ə-ŋ.
 FUT-be-E-FUT:3sg.s
 「あなたたちの中でスープが上手に作れる者にユルグンワジャムが手に入るだろう。」 (NA Text 4-246)

以上から、アリュートル語の N 形はコリャーク語の N 形の意味とほぼ近いが、例外的に事象叙述と考えられる例も見られることがわかる。

3.3. チュクチ語

次に、N 形が属性叙述のみならず事象叙述としても様々な意味を表わす点で、コリャーク語の N 形とは大きく異なるチュクチ語についてみる。チュクチ語ではアリュートル語同様、N 形は形容詞としてだけでなく、動詞の屈折形式としてもとらえられてきた。Skorik (1977) は、N 形を本来は形動詞であったものが次第に名詞修飾機能を失い、定形動詞の一種となったものとみなし、動作の流れの非限界性を表わす第 2 現在時制あるいは現在・過去時制に分類している。具体的には、大きく次の 3 つの意味を表すとしているが、いずれも属性叙述ではなく事象叙述である。下の例のグロスは、Skorik (1977) の例文にはないため筆者が施し、呉人徳司氏にチェックしていただいた。

(a) 発話時点まで続いてきた習慣的動作

- (28) Ətri qonpə ɲoten-ɣəty-ə-k n-ə-kupre-tku-qinet.
 they(ABS) always this-lake-E-LOC IPF-E-lay.a.net-ITR-3PL.S
 「彼らはいつもこの湖に網を張っている／張っていた。」

(b) 過去において進行中の動作

- (29) N-ə-rayt-ə-jyəm ajwe, naqam ətlon jaynaw-ʔe-Ø.
 IPF-E-go home-E-1SG.S yesterday then he/she(ABS) meet-PF-3SG.S
 「昨日私は家に帰る途中で、彼が会ってくれた」

(c) 不特定の過去

- (30) Kətur ətlon amqənʔəso n-ə-ttet-qin ɲaj-etə.
 last year he/she(ABS) everyday IPF-E-climb-3SG.S mountain-DAT
 「去年、彼は毎日欠かさず山に登っていた。」

Nedjalkov (1994) も同様に、N 形を非未来不完了形のひとつとして、動詞の屈折体系の中に位置づけている。Nedjalkov (1994) は、N 形が表わす意味として、Skorik (1977) があげている習慣的動作、過去において進行中の動作、不特定の過去に加え、発話時に進行中の動作、過去の動作をあげていることにも注意されたい (Nedjalkov 1994:295-296)。

A. 発話時に進行中の動作

- (31) ‘Nə-req-jyət?’ – ‘waj-əm nə-rilq-u-jyəm.’
 IPF-what.do?-2:SG well IPF-porridge-eat-1:SG
 「お前は何をしているのだ？－私はおかゆを食べている。」 (Nedjalkov 1994:295)
- (32) ‘Iʔam nə-tergat-eyət.’
 why IPF-cry-2:SG
 ‘Why are you crying?’
 「なぜお前は泣いているのだ？」 (Nedjalkov 1994:295)

B. (発話時点の前の) 過去の動作

- (33) ‘ʔerkut nə-cimʔu-jyəm: kejnə-n
 but IPF-think-1:SG bear-ABS
 tə-tənpə-n qətləyi ʔorawetlʔa-n.’
 1:SG-thrust.knife-3:SG:AOR it.turns.out man-ABS
 「しかし私はクマをナイフで突いたと思っていた。しかし、それは人だったのだ。」
 (Nedjalkov 1994:295)

(34) ‘Ajwe n-iw-iyət:…’

yesterday IPF-say-2:SG

「昨日、お前は言っていた。」

(Nedjalkov 1994:295)

とはいえ、呉人徳司氏（私信）によればチュクチ語の N 形には属性叙述の意味もみられる。さらに、コリャーク語において N 形が事象叙述の KU 形と対立しているように、チュクチ語の N 形は発話時点との関係性がある非未来完了の -rkən (以下 RK 形) と対立している。次の (35)(36) は、呉人徳司氏に調査で収集した例を提供していただいたものである。(35a)(36a) は属性叙述の N 形の例、(35b)(36b) が対応する事象叙述の RK 形の例である。コリャーク語同様、場所名詞が属性叙述の (35a) では絶対格で現れているのに対し、(35b) では場所格で現れており、ここでも斜格名詞を主題として取りたてるための操作がおこなわれていることがわかる。

(35a) ŋotqen relku-n n-om-at-qen-Ø.

this room-ABS.SG PRP-warm-VBL-3TOP-SG

「この部屋は（恒常的に）暖かい。」

(35b) ŋotqen relku-k om-at-E-rkən.

this room-LOC warm-VBL-E-IPF

「この部屋は（今）暖かい。」

(36a) Lʔelen-kə n-ə-kətəjy-at-qen-Ø.

winter-LOC PRP-E-wind-VBL-3TOP-SG

「冬には（恒常的に）風が吹いている。」

(36b) ŋaryən kətəjy-at-ə-rkən.

outside wind-VBL-E-IPF

「外では（今）風が吹いている。」

4. チュクチ語とコリャーク語の N 形の違いとその要因

以下ではまず、これまでの考察で得られた結果を総括する。

- a. イテリメン語には N 形がなく、形容詞には -laχ 形が用いられる。ただし、N 形同様、属性叙述機能を担っている可能性のある k’-.-ʔin/-ʔan という接周辞がみられる。
- b. アリュートル語では例外的に事象叙述の例が見られる。
- c. チュクチ語の N 形は、属性叙述だけではなく事象叙述の意味を担っている。

イテリメン語には N 形自体は存在しないため、比較の対象から外す。以下ではコリャー

ク語のN形と意味・機能面で違いの大きいチュクチ語に焦点を当てコリャーク語と比較し、アリュートル語にも言及しつつ、その違いを生み出す要因について考えてみる。

コリャーク語とチュクチ語とでN形の意味・機能が異なる要因は、両言語の動詞の屈折体系の違いとも無関係ではないと考えられる。まず、コリャーク語事象叙述文における動詞屈折形式は、基本的に完了／不完了というアスペクトと未来／非未来というテンスの組み合わせからなる。

コリャーク語の事象叙述文における動詞屈折形式は、基本的に完了／不完了というアスペクトと未来／非未来というテンスが組み合わさってできている。また、自動詞では主語の、他動詞では主語と目的語のというように動詞の側で人称と格の標示がなされる。そのため、対応する自立の人称代名詞の出現は義務的ではない。下表4では、自動詞語幹 jet「来る」の屈折形式（3人称単数主語、直説法）を示す。

表4 自動詞 jet「来る」の屈折形式（3単主、直説法）

	非未来		未来
	結果	完結	
完了	ye-jel-lin	jet-ti	je-jet-ə-ŋ-Ø
不完了	ku-jet-ə-ŋ-Ø		je-jet-iki

この表の網掛けになっている非未来不完了相の部分、すなわち、ku-...-ŋ という接周辞からなる形式（KU形）が属性叙述のN形と対立する事象叙述の形式で、過去 (37) あるいは現在 (37) に起きている出来事や状態を表わす（-Ø は、3人称単数主語マーカー）。

- (37) ŋanko apuqa-k janot ko-tva-ŋ-e.
 there Apuka-LOC before IPF-live-IPF-3DU.S
 「彼ら二人は以前アプカに住んでいた。」

- (38) əməŋ meki-w ŋanko va-lʔ-o ecyi k-awje-la-ŋ-Ø.
 all who-ABS.PL there be.present-PART-ABS.PL now IPF-eat-PL-IPF-3S
 「そこにいる人たちは今、皆、食事をしている。」

一方、チュクチ語については Nedjalkov (1994) がテンス・アスペクト形式を非未来／未来テンス、発話時点との義務的な時間関係の有無、完了／不完了アスペクトの対立からなるとしている。この3つの2元的特徴をもとに Nedjalkov (1994:281) が示した自動詞 jet「来る」3単主の直説法、命令法、条件法のテンス・アスペクト形式の表から、直説法の部分のみを抜き出して下表5に示す。

表5 チュクチ語自動詞 jet「来る」の直説法（3人称単数主語）の屈折形式
(Nedjalkov [1994:281] に基づき作成)

非未来			未来
	発話時点との関係性なし	発話時点との関係性あり	
完了	ye-jet-lin	Ø-jet-γʔi	re-jet-γʔe
不完了	nə-jet-qin	Ø-jetə-rkən	re-jetə-rkən

また, Nedjalkov (1994) のあげている自動詞 wiri「登る」の N 形の活用パラダイムは (39) のとおりである。

(39) 自動詞 wiri「登る」

nə-wiri-jyəm	「私は登る／登っている／登っていた。」
nə-wiri-jyət	「あなたは登る／登っている／登っていた。」
nə-wiri-qin	「彼／彼女は登る／登っている／登っていた。」
nə-wiri-muri	「私たちは登る／登っている／登っていた。」
nə-wiri-turi	「あなたたちは登る／登っている／登っていた。」
nə-wiri-qine-t	「彼らは登る／登っている／登っていた。」

チュクチ語とコリャーク語の動詞の屈折システムは基本的にいずれも非未来／未来というテンスと完了／不完了というアスペクトとの組み合わせにより成り立っている点では共通している。ただし、非未来・不完了の枠組みが異なることに注目されたい。すなわち、コリャーク語ではひとつの形式 ku-/ko-...ŋ があるだけであるのに対し、チュクチ語では、nə-...-qin と -rkən（以下、RK 形）という 2 種類の形式がある。このうち、後者の -rkən は「発話時に起きている動作」(Nedjalkov 1994:289) のみを表わし、過去の事態は表わさない。

- (40) Tə-jet-γʔek γəm, miŋkri qun tə-γətʔetə-rkən.
1:SG-come-1:SG:AOR I because 1:SG-be.hungry-PRES
「私は来た、なぜならばお腹がすいているからだ。」 (Nedjalkov 1994:289)

- (41) Iʔam rəjitku-te ine-nəγjewə-rkən.
why touch-CONV 1:SG-wake.up-PRES
「なぜお前は私を触って起そうとしているのだ？」 (Nedjalkov 1994:290)

一方、N 形は動詞の屈折体系においては発話時点との時間的關係のない非未来（現在・過去）／不完了を表す形式としてとらえられている。すなわち、コリャーク語では KU 形が過去、現在両方の不完了をカバーしているのに対し、チュクチ語では現在（進行形）しか表わさない RK 形を補完する形で、N 形がコリャーク語では KU 形が担っている不完了（現在／過去）という事象叙述の機能も担っていると考えられる。

ちなみに、調査に協力していただいた Ajatginina Tatjana Nikolaevna さんはコリヤーク語とチュクチ語の二言語併用話者であるが¹²、次の (42)(43) のように、チュクチ語で N 形で現われる例をコリヤーク語では同じ N 形ではなく KU 形で訳している。このことから、コリヤーク語とチュクチ語の N 形の異なる用法を同形式であっても混同していないことがわかる。(42a)(43a) がコリヤーク語の例、(42b)(43b) がこれらに対応するチュクチ語の例である。下線部の両言語での違いに注目されたい。

(42a) Voten γəty-ə-k əccu qonpəŋ ko-nyenəntval-la-ŋ-Ø.
this lake-E-LOC they(ABS) always IPF-spread.a.net-PL-IPF-3S

(42b) Ətri qonpə ŋoten-γəty-ə-k n-ə-kupre-tku-qinet.
they(ABS) always this-lake-E-LOC IPF-E-lay.a.net-ITR-3PL.S
「彼らはいつもこの湖に網を張っている／張っていた。」 (=28)

(43a) Wocen ajŋon ənno γamyac-ʕəl'o ko-təpyən-ŋəvo-ŋ-Ø.
last.year he/she(ABS) every-day IPF-climb-HAB-IPF-3SG.S
tənop-etəŋ.
hill-ALL

(43b) Kətur ətlon amqənʔəso n-ə-ttət-qin ŋaj-etə.
last.year he/she(ABS) everyday IPF-E-climb-3SG.S mountain-DAT
「去年、彼は毎日欠かさず山に登っていた。」 (=30)

一方、コリヤーク語と N 形の意味・機能が相対的に近いアリュートル語の動詞の屈折体系はどうなっているのだろうか？ Kibrik et al. (2004), Nagayama (2003) によれば、アリュートル語の場合も完了／不完了と未来／非未来が動詞の屈折体系における基本的な対立である。このうち非未来・不完了形は -tkən (以下 TK 形) という接尾辞によって表わされる。アリュートル語の /t/ はチュクチ語の /t/ と対応することがあるため¹³、この TK 形は上述のチュクチ語の RK 形と対応すると考えられる。しかし、その意味は、むしろコリヤーク語の KU 形同様、現在 (44)、過去 (45) いずれをも表わす不完了である。

(44) pəsa γə-nannə taq=anjin'mə-n.
for.the.moment you-ERG what=conversation-NOM+SG

¹² Ajatginina Tatjana Nikolaevna さんは、チュクチ族の父とエヴェン族の母を持つ。幼少時は家庭内でチュクチ語を母語として話していたが、小学校に上がったからは、コリヤーク族の中で生育した。その後、コリヤーク族の男性と結婚し、今日にいたっている。長年チュクチ族とは離れて暮らしてきたため、現在はコリヤーク語の方が流暢である。

¹³ ちなみにコリヤーク語では /j/ が対応する。

t-ivə-lqivə-tkən tuməkka-lwənə-k
 POT-say-LQIV-IPF another.person-INTER-LOC

「他の人のいる前で，お前は今どんな話をしているんだ？」 (KIB Text 22-68)

- (45) ʔəʔəqia.tku.lʔatə-tkən, ʔasu-wwi ʔa-kəly.al-laŋ.
 travel.by.dog.sledge-IPF pink.salmon-NOM+PL RES-harness-RES+3pl.P

「彼は犬ぞりで旅していた。(犬の代わりに) サケに (そりを) 曳かせた。」

(KIB Text 3-23)

以上，コリヤーク語，アリユートル語，チュクチ語の属性叙述と事象叙述における N 形と他の形式との分布を表にまとめるとおおよそ次のようになる。

表 6 コリヤーク語，アリユートル語，チュクチ語の非未来・不完了の現われ方
 (直説法・3 人称単数主語)

	属性叙述	事象叙述	
		過去	現在
コリヤーク語	n-...qin/-qen	ku-/ko-...ŋ	
アリユートル語	n-...qin/-qen	-tkən	
チュクチ語	n-...qin/-qen		-rkən

N 形の意味範囲という観点から見れば，コリヤーク語は専ら属性叙述をおこなうのに対し，アリユートル語は事象叙述も例外的におこなう。一方，チュクチ語は属性叙述から事象叙述へとその意味範囲を広げている。ちなみに，Nedjalkov (1994) では，チュクチ語においては，しばしば次の (46) のように，N 形と RK 形が交換可能であることが指摘されているが，それはまさにこのような事情によるものと考えられる。

- (46) Nə-req-iyət (→ reqə-rkən)? — waj-əm nə-rilq-u-jyəm
 IPF-what.do?-2:SG what.do?-2:SG:PRES well IPF-porridge-eat-1:SG
 (→tə-rilq-u-rkən).
 1:SG-porridge-eat-PRES

「お前は何を食べているのだ？—そう，おかゆを食べているんだ。」

5. おわりに

以上，本稿ではコリヤーク語の属性叙述専用形式である N 形が，同系の諸言語でどのように現われているのかを主に先行研究をもとに検討した。その結果，明らかになったのは大きく以下の 3 点である。

- ① イテリメン語は形容詞ならびに属性叙述形式に関して，他の同系の諸言語とは異なる特徴を示す。すなわち，形容詞には専用の -laχ という形式がある一方で，これとは別に属性叙述を示す可能性のある k'...ʔin/-ʔan という N 形とは異なる形式がある。
- ② コリヤーク語とチュクチ語の N 形は形容詞語幹にも動詞をはじめとするその他の語幹

からも作られる点では共通しているが、表わす意味範囲が異なる。特に顕著なのは、コリャーク語では専ら属性叙述専用に使われているのに対して、チュクチ語においては N 形が属性叙述のみならず、事象叙述へとその意味を拡張している点である。このような違いは両言語の動詞の屈折体系とも密接な関係がある。すなわち、コリャーク語の不完了（直説法）の KU 形は 1 つの形式で現在も過去も表わすことができるが、チュクチ語の不完了の RK 形の表わせる事態は現在のみで過去は表わすことができない。そこで本来、時間を超越した属性を表わす N 形がその空白を埋めるために援用された結果、N 形の意味範囲がコリャーク語よりも広範にわたるようになった。

- ③ アリュートル語は意味的にはコリャーク語と、形態的にはチュクチ語と共通点をもつ。すなわち、チュクチ語の RK 形に形態的に対応する TK 形があるが、この形式はコリャーク語の KU 形同様、過去・現在いずれをも表わすことができる。そのために、N 形は不完了の部分に援用されることがなく、属性叙述専用に使われることが可能である。

今後は、先行研究から得られた以上の知見の妥当性を共同研究によってより詳細に検証していきたいと考えている。本稿では、まずはそのための基礎作業をおこなった次第である。

【略語・略号】

ABS=absolutive; ALL=allative; ADJ=adjective; AOR=aorist; AP=antipassive; CONV=converb; DAT=dative; DES=desirable; DUR=durative; E=epenthesis; ERG=ergative; HAB=habitual; INF=infinitive; INSTR=instrumental; INT=intensifier; IPF=imperfective; INTER=place among given objects; ITR=iterative; LOC=locative; LQIV=inchoative; NML=nominalizer; NOM=nominative; O=object; OBL=oblique complement; PF=perfective; PL=plural; POSS=possessive; POT=potential; PRES=present; PRP=property predication; PSN=proper noun; RES=resultative; S=subject; SG=singular; TOP=topic; VBL=verbalizer; 1=first person; 2=second person; 3=third person

【参考文献】

- Bogoras, W. (1922) Chukchee, In Franz Boas (ed.) *Handbook of American Indian Languages. Part 2, Bureau of American Ethnology, Bulletin* 40: 631-903. Washington D.C.: Smithsonian Institution.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136: 1-34.
- Kibrik, A.E., Kodzasov S.V. and Muravyova, I.A. (2004) *Language and Folklore of the Alutor People*, ELPR Publication Series A2-042. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- 呉人 恵 (2009) 「コリャーク語の形容詞ーその動詞的および名詞的性格と類型論的位置づけー」『アジア・アフリカ言語文化研究』77: 35-62. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

- 呉人 恵 (2010) 「コリヤーク語の属性叙述－主題化のメカニズムを中心に」 『言語研究』 138: 115-147.
- 呉人 恵 (近刊) 「コリヤーク語の属性叙述－項から主題への変換のメカニズム」 影山太郎編『属性叙述の世界』 265-283. 東京：くろしお出版.
- Kurebito, M. (ed.)(2001) *Comparative Basic Vocabulary of the Chukchee-Kamchatkan Language Family : 1*. ELPR Publication Series A2-011. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Kurebito T. and Zhukova, A.N.(2004) *A Basic Topical dictionary of the Koryak-Chukchi Languages*. Asian and African Lexicon Series 46. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Nagayama, Y. (2003) *Очерк грамматики алуторского языка*. ELPR Publication Series A2-038. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Nedjalkov, V. P. (1994) Tense-aspect-mood forms in Chukchi. *Sprachtypologie und Universalienforschung* 47 (4): 278-354.
- 小野智香子 (2011) 「イテリメン語の動詞人称接尾辞の機能について」 『北方言語研究』 1: 23-39.
- Skorik, P. Ja (1977) *Grammatika chukotskogo jazyka*. Ch.2, Leningrad.
- Volodin, A.P. (1976) *Itel'menskij jazyk*. Leningrad: Nauka.
- Volodin, A.P. (1997) Itel'menskij jazyk. *Jazyki mira. Paleoaziatskie jazyki*. 60-71. Moskva.
- Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjanskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

Property Predication in the Chukchi-Kamchatkan Language Family:
with Special Focus on Semantic Similarities and Differences among the Languages

Megumi KUREBITO
(University of Toyama)

Based on previously attained data, the present paper examines the cognate and functional equivalents of the Koryak property predicative circumfix *n-...-qin/-qen* (N form) in cognate languages of the Chukchi-Kamchatkan family such as Itelmen, Alutor, and Chukchi. The results reveal,

- (1) Itelmen shows features different from other cognate languages in that adjective forms and property predicative forms break into separate morphological types, that is, the suffix *-laχ* proper to adjectives and *k'-...-ʔin/-ʔan* proper to property predication.

- (2) Koryak and Chukchi are similar to each other in that N forms in both languages are derived not only from adjective stems but also from the stems belonging to other word classes, that is, verbs, nouns and adverbs. They also contrast in that in Chukchi an N form derived from a verbal stem is not only used for property predication but also extends its meaning to event predication, that is, imperfective for past and present events. This difference is closely related to that of the verbal inflectional systems in both languages. Koryak imperfective *ku-/ko-..-ŋ* (KU form) refers to both past and present events, while Chukchi imperfective *-rkən* (RK form) refers only to present events. Therefore, it seems that the N form is employed in order to fill the void in the inflectional paradigm.
- (3) Alutor shares semantic similarity with Koryak and morphological similarity with Chukchi. That is, Alutor has an imperfective form *-tkən* (TK form) which is etymologically cognate with the Chukchi RK form. However it can refer to both the past and present. This is most likely the reason why the N form does not extend its meaning to event predication and is almost exclusively used for property predication.

(くれびと・めぐみ kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp)